

許金生著『近代上海日資工業史（1884-1937）』  
学林出版社（上海），2009年

吉 田 建一郎

1. はじめに

本書は、19世紀末～1937年の上海における日本資本（日中合弁も含む）の「雑工業」（綿紡織業以外の様々な工業）の発展と変容に焦点をあて、これを支えた背景、個々の企業の経営発展戦略、上海の近代工業発展史における位置と役割などを具体的に明らかにしたものである。本書は、著者が2008年に立命館大学大学院経済学研究科に提出し学位を得た博士論文を基礎にまとめられた。

本書の「後記」によれば、著者が本書の主題と関係の深い「近代上海における日本の工業活動」を研究テーマに選んだのは1998年であった。この年、復旦大学（上海）の日本研究センターでは、「近代上海における日本の社会・経済・文化活動」という研究プロジェクトが開始された。このプロジェクトで経済活動に関する研究を担当することになった著者は、先行研究の蓄積が多い綿紡織業以外の工業に焦点をあてることを決めた。

著者は、2000年に研究・教育のため来日した後、大分大学経済学部、山口大学経済学部東亜経済研究所、滋賀大学経済経営研究所などを中心に、関係史資料の収集とその分析を進め、成果を学術論文として相次いで発表した。そしてこれが博士論文、さらに本書の完成へとつながった。

2. 構成と内容

本書の構成は次の通りである。

引論

- 第1章 日資雑工業発展簡史
- 第2章 各業発展状況
- 第3章 日資企業的投資
- 第4章 日資企業的経営
- 第5章 日資企業的経営業績

第6章 日資企業経営者の系譜  
第7章 日資企業と抵制日貨運動  
第8章 日資企業的地位和作用  
結論

近代上海において、綿紡織工業以外に日本資本のどのような工業部門の企業が、いつからどれくらいの投資・生産規模で活動したのか、またそれらが上海の工業発展の中でどのような位置にあり、いかなる役割を果たしたのか。冒頭の「引論」によれば、以上のような問題について従来十分に検討されてこなかったことが、本書の主題に関心をよせるに至った大きな動機であった。

「引論」では、本書が考察を加える6つの問題が挙げられている。(1) 工場の設立時期、上海進出のきっかけ、製造品目など日系雑工業に関する基礎的事実の把握、(2) 雑工業に対する日本資本の投資の実態や特徴、(3) 日系雑工業企業の経営の実態や特徴、(4) 日系雑工業企業の経営に対する日貨排斥運動の影響、(5) 日系雑工業企業の活動が近代上海の工業に及ぼした影響、(6) 近代上海の工業発展史における日系雑工業の位置についてである。そして本書の意義として、(1)～(6)の考察を通して、近代上海の工業化を支えた条件をよりの確かつ総体的に明らかにできること、近代日本による中国での経済活動について全体的な検討を進めるための手がかりを得られること、議論の中心が日系の中小企業であるため、これまで大型企業に焦点が集まることの多かった近代中国の外国資本工業に関する研究に新たな視点と観点を提示しうることなどが挙げられている。

第1章は、上海において日系雑工業がどのような特徴をもちながら展開したかについて、萌芽期（1884-1903年）、勃興期（1904-1918年）、曲折発展期（1919-1931年）、再発展期（1932-1937年）の各期に分けて論じる。そして約半世紀にわたる日系雑工業の歴史に見られる特徴として、次の5点を挙げる。(1) 業種が非常に豊富である、(2) 工場数が多い、(3) 資本金が10万円以下、5万円以下といった小規模工場が多く、零細性が顕著である、(4) 工場の開設率と閉鎖率がかなり高い、(5) 各期に代表的な産業がある。日本商が新たな産業に絶えず投資をし事業を行ったのは、中国の工業発展の潮流に順応するためであった。

第2章では、雑工業を11の業種（「印刷」「皮革」「捺染・染織・精練」「化学」「食品」「繊維」「製紙」「金属加工」「耐熱品」「電気用品」「その他」）に分けて、各業種の主要工場の設立時期、生産の内容・規模・特徴を論じるほか、各産業成立の背景や盛衰についても分析を加える。皮革工業について、規模の大きな日本資本企業が中国資本よりも優勢に立っていたことが指摘される一方、製紙工業については、製紙原料の産地と上海との距離の遠さや日貨排斥運動などの影響を受けて、日本資本企業が持続的に発展しえなかったことが指摘されるように、雑工業を構成する各業種の歩みが多様であったことを理解できる。

第3章は、第1章で示した4つの時期の投資総額、各産業の投資額を見積もるとともに、投資の特徴や投資の方向性の変容を分析する。そして日本商による上海の雑工業投資は、対日ボイコットや一・二八事変といった政治的・社会的変動に直面しながらも一貫して増加する傾向にあったこと、投資総額は少額とは言えないが、各工場の平均投資額からは日系雑工業企業の零細性が読み取れること、投資の範囲は広く各工業にわたるが、上海の経済発展の変化に伴い投資の重心

が変わっていることを指摘する。

第4章は、日系雑工業企業が何をよりどころとして長期にわたり上海に足場を固めることができたのかを問い、先進的な技術の存在が重要であったことを強調する。また上海の経済発展の潮流と歩調をあわせて絶えず投資の方向を調整したことや、三井や角田に見られる産業チェーンも日系雑工業企業の発展と拡張に大きな役割を果たしたこと、中国資本や外国資本の企業、あるいは日系の同業企業との間で競争を展開しつつも協調の道を模索したことも、日系雑工業企業の生存にとって重要であったことを強調する。

第5章は、4つの個別企業の経営の推移を跡づける。焦点をあてるのは、財閥と関わりを持ち比較的早い時期に創設された上海製造絹糸株式会社、大規模な資本をバックに持つ上海印刷株式会社、早い時期に上海に根をおろした中小商人により創設された宝山玻璃廠、1920年代末からの日本の対上海「投資熱」期に開業した中華金属製造廠である。創設の時期、背景、資本力、産業部門の異なるそれぞれの企業が、利益をあげ発展する機会を得たことを具体的に示している。

第6章では、日系企業の上海進出の背景や、日系企業の創設者・経営者の特徴が検討される。日系企業の上海進出には、中国における投資環境の突然の変化のほか、産業ごとに異なる多様な背景があった。また企業の創設者や経営者は、中小商工業者や技術者の占める割合が高かった。そして以上のことは、企業数が多い、業種が豊富である、零細性が顕著である、倒産率が高いといった日系雑工業企業の特徴を形作る一因になったと主張する。

第7章は、1908年から1931年にかけて、中国で9回にわたり発生した対日ボイコット運動が上海の日系雑工業企業に与えた影響を論じる。二十一カ条要求をきっかけに発生した第3次のボイコット（1915年）から、済南事件をきっかけとする第8次のボイコット（1928年）まで、中国人を対象とした製品の製造を行う工場を中心に、日系工場が受ける損害は拡大する傾向にあったが、大多数の日系工場の生存の基礎を直接揺るがすには至らなかった。しかし、満洲事変や一・二八事変を契機とする第9次のボイコット（1931年）により、上海の日系工場は過去にない大きな打撃を受け、深刻な危機に陥ることになった。

第8章では、日本資本の雑工業企業が、近代上海工業史でどのような位置を占めたのか、また上海における近代工業の出現と発展にどのような役割を果たしたのかが論じられる。日系雑工業は確かに零細であるという特徴があるが、ある業種の中で長期にわたり重要な、あるいは独占的な地位を占める企業も少なくなかった。また日本資本企業の工場は、近代工業の開拓者として、中国の民族工業樹立のモデルとなることも多かった。このため日本資本の雑工業企業は、民族工業の誕生と成長、さらに民族工業資本による近代技術の掌握と技術革新を促したと主張する。

結論では、綿紡織工業以外の領域でも日本資本は非常に活発な活動を展開し、上海における近代工業の重要な構成要素であったと指摘した上で、各章の内容に基づく総括を行う。日本資本雑工業の発展史に見られる5つの特徴（投資対象の業種が多岐にわたる、工場数が多い、創設者は基本的に中小商人・中小工業家・技術者である、開業率と閉鎖率が高い、投資の重点が時期により異なる）や、雑工業における「国策」的企業の存在、対日ボイコットの強い影響、上海での存立基盤として先進技術の採用や絶えざる技術革新、そして上海の経済発展への順応があったことなどが述べられる。

### 3. 所 感

本書の内容について、評者が特に高く評価したいのは次の3点である。

1つめは、近代上海の日系雑工業を研究対象として正面から取り上げ、それがどのように展開したのかについて、長期的な時間軸を設けて具体的に描き出した点である。本書冒頭「引論」の「2. 先行研究状況」で指摘されるように、これまで近代上海における日系雑工業の活動について、日本の対中国投資に焦点をあてた研究の中で扱われることはあったが<sup>1)</sup>、個々の工業の実態はどうか、日系雑工業の動向を全体としてどのように評価するかなど、研究の空白が多く残されてきた。例えば中国で出された上海の近代工業史関連の研究成果は<sup>2)</sup>、主に中国資本企業や一部の有名な外資企業に焦点をあてており、日系雑工業企業について十分な検討がなされてきたとは言いがたい。こうしたなか本書は、日系雑工業史の全体的な流れとともに、個々の産業やこれを構成する個々の企業の動向について実態を丁寧に明らかにし、研究の空白を相当程度埋めることに成功した。新たな事実の発見やその歴史的意義の検討のほか、今後の研究の手がかりを提供することも研究書の価値を高める重要な条件であると思うが、本書はこの条件も満たしている。本書は論証の過程で、戦前期刊行の日本語文献を中心に多彩な史資料を用いている。各章の本文や脚注、さらに本書巻末の附表で言及されるそれらの史資料は、今後、近代中国の日系雑工業史研究をさらに深化させたい場合に、まずどのような史資料に接近する必要があるのかという道筋を示すものとして大いに価値があると思う。

2つめは、上海の日系雑工業企業の経営に関わりを持った個々の人物の動向を丁寧に跡づけようとした点である。個々の産業の歴史は、個々の企業・工場の日々の活動によって形作られるが、活動を支える軸はヒトであるので、個々の企業や産業とともに、それらと関わりを持った人物を主語に据えた研究を進めようという意識を持つ必要がある。本書は、個々の工業の発展状況を扱う第2章や、企業の経営者・創業者の経歴に焦点をあてる第8章を中心に、上海の雑工業企業の経営に関わりを持った日本人について言及がなされ、ヒトの姿が見える生き生きとした工業史研究の成果となっている。本書が言及する全ての日本人について詳細な経歴が明らかにされているわけではないが、今後、具体的な人物に焦点をあてた日系雑工業企業史研究を進めるための手がかりを与えてくれていることは貴重な成果であるといえよう。

3つめは、上海工業史における日系企業の位置という視点を重視していることである。本書は第8章で、日本資本が優勢にたった工業部門を中心に、上海雑工業史における日系企業の位置を紹介している。これにより読者は、本書で多くの頁を割いて明らかにされる日系雑工業企業の活動の実態を、広い視野で相対的に理解することができる。第8章ではまた、日系雑工業企業が技術の展示・伝播の窓口となり、中国の民族工業資本による近代的技術の掌握・革新を促す側面があった点を指摘している。近年の在華紡研究では、中国への技術移転の実態に高い関心が寄せられている<sup>3)</sup>。第8章の指摘は、中小規模の企業を中心とする雑工業を研究する際にも、技術移転の問題に関心を寄せることが重要であることを示す有意義な指摘と捉えてよいのではないだろうか。

上記のように、本書には多くの優れた点があるが、一方で、検討を進める余地が残されている

と感じた点もあった。以下3点挙げておきたい。

1つめは、上海以外の都市の日系雑工業史と本書の成果との関係についてである。本書「引論」の「2. 先行研究状況」でも言及されているように、近代中国都市の日本人の活動を扱った研究は一定の蓄積があり、大連や青島に焦点をあてた研究では、日本人と雑工業との関わりについての言及も見られる<sup>4)</sup>。では、本書で明らかになった上海における日系雑工業の展開と、大連や青島といった他都市のそれとの間にどのような共通点や相違点があるのだろうか。この点について何らかの整理がなされれば、上海に焦点をあてる意義がより明確になり、また近代中国における日本人のビジネスに見られた特徴の地域的な差異を具体的に明らかにする可能性が開けるのではないだろうか。

2つめは、製品流通における日系雑工業と中国商との関係についてである。評者は以前、本書で言及される日系企業の一つである江南製革の経営について検討したことがある<sup>5)</sup>。その際参照した資料に<sup>6)</sup>、江南製革が広東人経営の広発源や寧波人経営の隆泰といった中国商と取引関係を持ったことや、1930年代前半に江南製革と取引関係のある中国商が、製造を停止していた工場の再開を期待したなどが記載されている。日系雑工業企業が製品を中国市場に流通させる際に中国商とどのような関係を作るかは重要な問題であり、中国商との関係が企業の経営に影響を与える例は少なくなかったのではないだろうか。本書には、東亜煙廠が日本商の松尾洋行を特約店として、製品を江蘇、浙江、安徽、江西などに販売したことや（107頁）、須藤洋行が国民党交通部に大量の電機用品を提供したことが指摘されるなど（191頁）、日系企業工場の製品の流通に言及した箇所はあるものの、流通をめぐる日系企業と中国商との関係に関する叙述は少ないという印象を受けた。この部分がより明確になることで、日系雑工業企業の発展や衰退の背景を、より多角的に理解する可能性が広がったのではないだろうか。

3つめは、日系雑工業企業の衰退の背景についてである。本書では、日系企業の経営に影響を与え衰退をもたらした要因として、一・二八事変や対日ボイコット、民族工業資本の発展などがしばしば指摘される。この指摘に評者は同意するが、企業経営の状態は、対日ボイコットに代表される外的な要素のほか、企業内部を取り巻く条件にも少なからざる影響を受けたであろう。評者は以前、本書で言及される中華皮革廠の経営の推移を検討した際、対日ボイコットのほか、中華皮革廠の経営母体である中華企業株式会社が製革業経営をあまり重視していなかったことが、中華皮革廠の衰退に深く関わっていたことを指摘した<sup>7)</sup>。本書には、日系の2つの缶詰工業企業が製造技術の未熟さにより市場の信用を失い、倒産につながったことを指摘した箇所があるが（123頁）、個々の企業の経営を規定した企業内部の条件について検討を深める余地はまだ少なからず残されているように思う。

#### 4. おわりに

以上、本書の概要と読後の所感を述べた。上記のように、評者は以前、本書でも扱われている上海の日系製革企業の経営の推移について考察を加えたことがある。様々な工業部門に検討を加えた本書とは対照的に、製革業という一つの産業を検討したにすぎないが、各所に分散している

断片的な資料を可能な限り集め、それらを組み合わせて史実を明らかにし、論稿をまとめるまでにはかなりの手間がかかり、一進一退の状態が長く続いたことを記憶している。このため、本書の準備に必要な多岐にわたる雑工業関連史資料の収集・分析という作業は非常に手間のかかるものであったと推察する。著者が地道な作業の成果を書物の形でまとめたことに敬意を表したい。今後、本書を手がかりに日系雑工業史研究が発展することを期待する。

#### 注

- 1) 例えば、杜恂誠『日本在旧中国的投資』上海社会科学院出版社，1986年。
- 2) 例えば、徐新吾・黄漢民『上海近代工業史』上海社会科学院出版社，1998年，黄漢民・陸興龍『近代上海工業企業發展史論』上海財經大学出版社，2000年。
- 3) 例えば、富澤芳亜「在華紡の遺産—戦後における中国紡織機器製造会社の設立と西川秋次」森時彦編『在華紡と中国社会』京都大学学術出版会，2005年。
- 4) 例えば、庄維民・劉大可『日本工商資本与近代山東』北京，社会科学文献出版社，2005年，柳沢遊『日本人の植民地経験—大連日本人商工業者の歴史』青木書店，1999年。
- 5) 拙稿「20世紀前期の上海における日系製革企業—江南製革と中華皮革」『史学』79巻1・2号，2010年。
- 6) ニッピ85年史編集委員会『ニッピ85年史（上巻）』株式会社ニッピ，1992年。
- 7) 前掲，拙稿。

